平成 20 年度大学院修了式における学長式辞（平成 21 年 3 月 24 日）

本日ここに修士並びに博士の学位を得られました皆さんに対し、私は埼玉大学を代表し、心からお祝いを申し上げます。また、今日まで院生諸君の勉学を支えてこられたご家族の方々に対しましても、そのご労苦に敬意を表するとともに、心からお祝いを申し上げたいと存じます。

本日、大学院の課程を修了し、修士の学位を得た人は 409 名、博士の学位を得た人は 46 名です。このなかには、祖国を離れて埼玉大学で研究に励んできた留学生が、修士・博士合わせて 50 名含まれております。また、大学院課程の修了生以外に、学位論文を本学大学院に提出して論文審査に合格し、博士の学位をえられた方が六名います。皆さんのなかにはこれからも大学で研究に従事する人もいるでしょうが、今日を境に、企業や民間の研究所などに活動の場を移される方も多数います。また祖国に帰って、国のために働くという留学生もいます。私は、いずれの方も大学院での研鑽の成果を充分に生かし、それぞれ将来計画の実現に向けて一層奮励努力されるよう祈って止みません。

本日は、新しい旅立ちの記念すべき日でありますが、このときにあたり、皆さんにお願いしておきたいことがあります。それは、皆さんが大学院で行い、今後もさまざまな場で続けていかれるであろう研究の「for　what」を問うこと、何のための研究であるかと問うことです。

科学と技術の発達が人類に恵みだけを与えるものであるならば、このように研究の意味を問うことはさほど重要ではありません。たしかに、近代の科学と技術の発達が人類社会にもたらした恩恵は、計り知れないものがあります。医療と公衆衛生、医学の進歩がもたらした難病克服、人間の寿命延長、物質的豊かさに支えられた便利で快適な生活等々、いちいち挙げるときりがありません。

しかし、20 世紀における科学と技術の急速な発達は、軍事目的の膨大な研究開発投資によって実現された点を看過できません。戦争に科学が動員され、戦闘機や大量殺戮兵器が開発されました。広島、長崎に投下された原子爆弾は、20 世紀初頭の科学の成果である相対性理論、量子理論に基づく兵器です。科学研究の結果は、人々に恐怖を抱かせるものとなりました。加うるに、科学と技術の発達が可能にした人類社会の豊かな社会化、便利な社会化は、環境汚染や資源の枯渇といった問題を引き起こし、人々の不安をもたらすようになってきたのです。

人々の不安を招くような科学と技術の発達の結果の多くは、必ずしも、研究者が意図して起こしたものとは言えません。その限りでは、わずかですが、科学の発展の結果に研究者が責任を引き受けなくてもよいとする論法を可能とします。17 世紀に誕生した近代科学は、知の営みを価値の問題から切り離し、純粋に客観的立場から対象を認識するという立場をとってきましたが、ここで言う論法とはこの近代科学の伝統的立場に立脚した、科学・技術の客観性論あるいは中立性論というべきものです。科学は客観的であり、技術は中立

的である、問題はそれを利用する人間の責任である、こういう論法がそれです。

こういう価値中立的な科学・技術の客観性論、中立性論は、科学研究が社会に影響を与える程度が小さい間は通用しました。私たちが何の憂いも感じることなく研究に専念できたという意味では、それは科学技術の発達を支える積極的意味を持ってきたと言って良いかもしれません。しかし、科学や技術が高度に発達し、研究の成果が人々の生活や社会のあり方に大きな影響を与えるようになった現代社会では、もはや通用しません。私はこれまで主として自然科学を対象にして話してきましたが、このことは程度の差はありますが、社会科学・人文科学についても言えることです。

「学術の府」である大学の「象牙の塔」というあり方のプラスイメージからマイナスイメージへの変化は、科学研究に寄せる人々の信頼の変化を象徴的に示すものといってよいでしょう。いまや、大学は社会から超絶した裁判所のような存在から、社会のためにある存在として自己変革することが求められています。そして、新しい学術のあり方として、science　for　society が求められてきているのです（日本学術会議学術のあり方常置委員会報告「新しい学術のあり方―真の science　for　society を求めて－」平成 17 年 8 月 29 日）。

皆さんも、埼玉大学の教員も、日々、それぞれの専門領域でしのぎを削る研究を行っています。その専門分野を見ますと、大変な速度で細分化・多様化してきました。たとえば日本学術会議への登録学協会の数は 1981 年から 2004 年の間に 1003 から 1730 へと増加し、特に人文・社会系では 363 から 820 へと、二倍以上に膨れ上がっています。このような細分化した専門領域の中で研究していると、研究の社会的意味を考える余裕もなく、必要も感じなくなってきます。私たちは、意識的に自分の研究の「for　what」を問う作業を行わなければなりません。私は、皆さんがこのような問いかけをし、社会から信頼を寄せられる研究者・社会人になっていただきたいと、願っています。

最後になりましたが、皆さん一人ひとりの将来が幸運に恵まれ、それぞれに悔いのない人生を送られることを祈念して、私の式辞といたします。

平成 21 年 3 月 24 日

埼玉大学長　上井喜彦